



堀田善衛全集 4

筑摩書房

堀田善衛全集 4

一九七四年九月二〇日第一刷発行

著者 堀田善衛

発行者 井上達三

発行者 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町三ノ八  
電話東京二九一七六五一（代表）  
郵便番号一〇一一九一  
振替東京四一二三

印刷 明和印刷株式会社  
製本 和田製本工業株式会社

堀田善衛全集

4

目次

記念碑

奇妙な青春

鬼無鬼島

解説 日本的心性と  
の対峙

真継伸彦

解題

455

445

342

175

3

記念碑 奇妙な青春 鬼無鬼島



## 記念碑

音楽のおかげで、ほんのしばらくずつでも放心状態になれることが康子には嬉しかった。けれども、それもやはりほんのしばらくずつにすぎなかった。ふと気が付くと、音の波は眼の下の舞台から熱風のように盛り上って来て、康子の坐った急な傾斜の二階の座席を掠めて這い上ってゆく。堂に轟く大声で、何か痛烈なことを囁かれているような気がするのであった。大声で囁く、とは、異様な云い方であったが、音楽は、人々の耳許を擦過してゆくとき、人おのおのに異なつたことを囁いてゆく。元来、康子はベートオヴェンの音楽を好まなかつた。フル・オーケストラの巨大な音の塊りを、次から次へと叩きつけて来る、ほっと一息つけたかと思うと、もう次の音塊が座席もろとも揺がすような力で押し寄せ襲いかかってくる。そういう何かしら押

しつげがましいところがこのドイツの音楽家であつて、生理的なまでに厭なのだつた。しかし、いつでもそうは思ひながらも圧倒され捲き込まれて、いつかそのリズムに乗せられてしまうのである。そして、乗せられ感動させられて自分の身に気付くと、何か恐怖にも近いものが心臓を締めつける。生身の人間には抵抗も何も出来ない、ゲルマンの森の奥にいるという破滅的な運命神が乗りうつて来るような気がするのであった。

音楽は、それを聴いている人を座席に釘付けにする。釘付けにしながら、自らの動きのなかに捲き込んでしまう。脇眼もふらずにいななければならない。演奏中に、ちらちらとあちらを見たりこちらを見たりする人は、音楽のなかにいない人なのだ。或は、いられない人なのだ。それは何も音楽だけには限らない……。

康子は疾風のように吹き上げて来る音にさからつて、思い切つたように身をのり出し、眼の下の、一階の中ほどの



席にゐる海軍少尉の服を着た菊夫と、いまどきまったく珍しくも、いや、大胆にも花模様和服に、袖はいくらかつめてあるとはいえ、ともかくも羽織まで着込んで来た夏子の二人を見詰めた。彼女は自分に何かを納得させようとして、先刻から何度も、あれはわたしの息子だ、菊夫だ、そして横にゐるのはその妻だ、夏子だ、と繰り返すのだが、胸のなかに、どうしてもこの当然事を素直に認めまいとするものがわだかまっている。どうしたというのだろうか。

一人息子の菊夫が兵隊姿になっているからか。そうではあるまい。なるほど、菊夫は御国に差し出したものですから、などとは、或る人々——或る人々？ そんな或る人々などというものがどこかにゐるのだろうか——のようには到底口には出来ないけれども。……それとも、息子や娘を縁付させた当座の母親というものは、誰でも、こうした一種の心寂しさで、思わぬ距離感に悩むもののだとして、そのせいだろうか。いや、それだけではない。また、こんな寂しさや距離感が出来たとき、それをかたみに語り合い慰め合うべき夫、菊夫にとつての父親とは、五年前に、夫の自殺によつて死別してしまつてゐるせいだろうか。それもあるかもしれない。菊夫は、どうやら夫の自殺の原因が、母親たる康子の不行跡のせいという、出所は外務省ときまつた世評を信じてゐるらしい。康子はまた、ふと兄のことを考えた。

音楽は一つのことを考え抜くことを許さない。音の波は耳許で泡を立てて碎けていた。飛沫は堂の隅々まで散りしぶく。康子の実兄の安原武夫は、ラバウルから命からがら選つて来た報道班員の話によると、極めて僅かの生き残りの部下とともにガダルカナルから転進し、ブーゲンヴィル島にとりのこされてゐる、というのであつた。到底選つては来ないだろう。飢え、悪疫、砲撃、原住民の怒り——死のための条件がこれほど完璧にそろつたところはない。昭和十九年十二月、日本を含めて、大東亜共栄圏といわれる広大な海と陸には、死のための条件の方がととのつていた。死が、危険が近づくと、あれはわたしの息子だ、横にゐるのは妻の夏子だという、間違ひのない事実だが、事実というもののあるべき次元から、ふわふわと離れ浮いてゆく——、そんな莫迦げたことがあり得ようか。それでは、わたし自身が果して石射康子であるかどうかさえ、あやしくなるではないか……。

いろいろに考えてみる。どれもみな少しずつあつてゐる。けれども、そのいずれもがすべてにびつたりするといふわけにはゆかない。

——根本的には、

と康子は一步踏み込むような気持で、思い切つて考えた。——いま（いまというのは、つまり三年前の十二月八日

以来ということだ)起つてゐることのすべてが、その偉大さも悲惨さをも含めてのことだが、とにかくすべてがどうにも現実であるとは信じられない気がしているからではないだろうか。すべてについてこれは仮のことなのだ、という気がしている。菊夫は、仮に海軍の航空予備士官となり、兄は五十に近い齡であるにも拘らず、仮に召集されて、日本の領土とは到底信じられない、地球の裏側ではないにしても、赤道を越えた、地球の向う側の、ガダルカナルという、それまでは聞いたこともない島へ、仮にやられ、いまはブーゲンヴィル島にいる……。また菊夫は、仮に夏子と結婚をして、——と、ここまで考えて来て、康子はしかし、びくりと乗り出してゐた身をひいた。菊夫と夏子が結婚をしたということは、動かし難い事実であつた。それが母親の眼から見ていかに危つかしく何とも無理な結婚であつたにしても、彼女はこの結婚には賛成してゐなかつた。しかし、いかに何でも自分の息子に向つて、あなたにもしものことがあつたら、夏子さんは、——などとは矢張り云えなかつた。周囲の誰かが云つてくれるかと思つたが、誰もそのことについてだけは何も云わなかつた。どうせ死ぬなら一度は、——という恐らくは菊夫同様のエゴイズムのようなものが、反対し切れぬ気持の奥底にこびりつき、いやな匂いをおおつてゐた。彼が航空隊を志願する、いや、既にし

たと云つたときも、彼女は詮ないこととは承知しつつも、あらわに賛成と口に出して云わなかつた、また云えなかつた。菊夫は正面から忠君愛国の論を説き、祖国日本の運命は我々青年の双肩にかかつてゐるのです、と云い切つたときも、康子は黙つて眼をあげ、菊夫の、骨ばつた、頼りなげな肩を見た。その言葉に、誰も反対出来なかつた。あらゆる論が、凄まじいエゴイズムを裏打ちとして大義名分をしか説かなかつた。少年たちの肩は、心細げに、寂しうに、瘦せてゐた。

足が大地を離れ、身は方々へ游行ゆきようしてゐた。音楽を聴いてゐるせいだろうか。十年も、いや、もつと前から戦争という音楽は、国民生活の低音部に入り込んで来て不気味に一切を揺がせはじめ、次第に侵蝕し、音域を拡げていつて十二月八日午前七時に、フル・オーケストラで爆発的に鳴り響いた。

『帝国陸海軍ハ本八日未明、西太平洋ニ於テ米英軍ト戦闘状態ニ入レリ』

『天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝国天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス朕茲ニ米國及ヒ英國ニ対シテ戦ヲ宣ス』

名状し難いものが身体を貫き、——それは感激感動と云つてもいい、驚愕と云つてもいい、恐怖と云つてもいい、

悲嘆と云つてもいい、怒りと云つてもいい、何と云つてもいい、——彼女を畳の上にうち倒した。腰をぬかした、と云つてもいい、とにかく、その頃高円寺にあった、いまは彼女の勤先の通信社の寮になっている家の、床の間の右隅に置いてあったラジオの前に、両手をついて坐り込んだ。涙がぼろぼろと、何かを無理にしぼったときのように滴り落ちた。彼女はラジオに向つて、或は宮城に向つて、また前線の将兵に向つて、或は参謀本部や軍令部に向つて、或は床の間に向つて、或は畳に向つて、或は彼女自身に対して、何かを訴えていた。訴えていた、——けれどもこれまた、感激感動していた、恐怖していた、怒つていた、悲しんでいた——何と云つてもいい、その全体であった。あの暗い、じめじめした、解決のあてどもめどもない、梅雨のような支那事變の憂鬱がいつぱんで吹き飛んだような気がした。姑の嫁いびりのような米国をはじめとする国々の圧迫から来る、文字通り隠忍自重の末の大爆発とも思えた。またその後の、間断ない軍艦マーチや抜刀隊の歌などを聞かされ、夜に入って八時四十五分、ハワイ急襲の大戦果を聞かされると、何かしら一線を、一つの限界を一気に飛び越してしまい、有頂天とはこのことかと思われ、それはとりもなおさず絶壁から思い切つて飛び下りた、その墜落の真最中のような、解放されて、軽やかになった、と同時に

眼には見えぬけれども重い重い引力にひかれてゆく、我にもあらぬ気持であった。あの時から、飯の、臨時の、そのときそのときの間人間になった……戦果の発表は、いかにも何千何万哩もの彼方から地球の弧をなした表面を駆け上り滑り下りて、若者の声で、やっただやっただ、と叫びながら息せききって飛んで来る感じを伝えていた。あのときから、音楽は新たな楽章に入つたのであった。十二月八日は誰にとつても一つの劇の題名であった。

あの朝、菊夫は前夜から四谷の夏子の家へ行つていて、いなかった。夏子の試験勉強の手伝いにいったのだった。康子はたった一人で勤めに出る用意をしていた。彼女の勤め先の国策通信社の海外局全員は、数日前から足止めをくい、ずっと詰め切りだったので、康子は疲労が甚だしくなつたので、許可を得て休養のために帰宅していたのであった。従つて、開戦、とまでは勿論知らなかったが、何かが近くあるらしいということは予感していた。けれども、午前七時の、開戦を報じた臨時ニュースのアナウンサーの慄え声を聞き、十一時四十分、出勤して全社員集合して勅語を聞き、勅語に続いて東条総理大臣の『大詔を拝して』というアジ演説を聞きしていると、あらかじめ予感していたなどということはついに何事でもなくなり、喜んだらいいのか、踊り出してもいいのだろうか、また天に向つて両

手をさし上げ何かを叫びでもしたらいいのか、所詮はどう仕様もなく町々を小走り気味で歩いてゆく人々のそののうな、うかぬ顔にならなければならなかった。その日の、通信社のある日比谷公園や、銀座界隈をゆく人々の顔は、彼女には、うかぬ顔、と思われた。仮面をつけているような、とも思われた。町筋や公園の樹木などがどうかかったり、空気に常ならぬ色がついたわけでもなかった。事の重大さに比べて、どうにも現実感が稀薄であった。事と人々のあいだにはひらきがあった。そのひらきを埋め、現実感を付与し、仮面に怒ったような花臉をつけるのが通信社をはじめとする報道業の仕事であった。人々は花臉のついた、信念と称し赤心とも称する、判断とはまた別な仮の顔を一つ用意しなければならなくなる。

床の間のラジオの前に頼ずいて、このいくさは長くなる、とは思った。けれども、その長さには、菊夫までが出なければならなくなる、という長さは、或は入っていないかかったかもしれない。入れたくなかったから入らなかつたのかも。それまでにはどうにかなるだろう、と。そして、後日康子は、夏子の父にあたる枢密顧問官深田英人の秘書のようなものを兼ね、週末には国府津の別邸へ行って老人が口述する覚書を筆記しながら、『それまでにはどうにかなるだろう』というのが、このいくさをはじめに

あたつての、またはじめてからもずっと、最高の、そして最低限の、戦争指導理念であつたことを知らねばならなかつた。それまでにはどうにかなるだろう、と……。それは本質的には樂觀でも悲觀でもなかつた、嚴密な、各方面からする統一ある計算に基づくものでもなかつた、何かさういう、いわば近代的な区分けとは別な、所詮は日本的な、とでもいうよりほかに尻のもつてゆきようないもの、だつた。それまで、とは、いつまでのことなのか、どういう時のことなのか、何が、また誰がどうした時が、どうなつた時なのか、日本全体、最高の人にとつても最低の人にとつても、一向にはつきりしていないようであつた。その漠然としたものが天佑というものと猜された。既に大根おろし一回分ぐらいが三日間のための野菜の配給であり、魚は八日に一回、鱈の切身一切れ、婦人用長靴下は十五人につき一足ということで廻つて来たのだが、この野菜と鱈の切身と靴下に対して責任をとるのではなくて、どす黒い水をたたえた濼にへだてられ、巨大な石を組んだ城壁のうしろの、暗い森のなかにいる漠然としたもの、現人神というものに対して責任をとることになっている以上、野菜と魚と靴下がどれまでになつていくかということは、事実以上のものにはなりえなかつた。事實は受け容れるより仕方がないということに、むかしからなつていた。受け容れ態勢と

いうことばはあつても、主張をする姿勢というものは、な  
いということになつていた。

舞台は、へんに静かだつた。音が落ちてゐる、と康子は  
感じていた。絃だけがピアノシモで底深く揺れるような旋  
律を奏でていた。やがてその旋律を孤独なトランペットが  
矢張りピアノシモで受けついだ。どういふ聯想からか、康  
子はお濠の無気味に淀んだ水をわけてゆく水鶏の姿を想つ  
た。あのお濠の向うの森の奥には、ゲルマンのそれとはま  
た違つた、極めてはつきりしたような、また漠然としたよ  
うな、デモンが棲んでゐる。漠然としたということばは彼  
女の聯想を導いて、昭和のはじめに『ぼんやりした不安』  
ということばを遺して自殺した芥川竜之介の面影を想わせ  
た。それは彼女の二十代の終り近い頃のことであつた。ト  
ランペットに代つてチェロとバスが暗く重い音を漂わす。  
流れは重い。水鶏はぶくりと水に沈み姿を消し、五秒、十  
秒、十五秒……、やがて思いがけないところへ可憐な姿を  
あらわす。蘇満国境から突然姿を消し、ブーゲンヴィルの  
密林のなかにまだ生きてゐるらしいという兄は、何を食べ  
て、いや、果して食べて生きてゐるだろうか。何かに食べ  
られてはいはないか。

なおも深く沈んだ、揺れてだけけるような音がつついて  
いた、地にめり込んでゆくような、深い淵に呑み込まれる

ような。ほつと吐息を一つつこうとしたとき、突然脅かす  
ようにタイムパニがとどろきわたり、それを合図に全楽器  
全奏で、人間をしほり上げて人間以上のものを無理にし  
ほり出そうとする苦しい努力が襲いかかつて来た。絃もフ  
リユートも何かを見出そうとして胸部をも切り裂こうとす  
る。康子は眼も耳もそむけなくなつた。それは人間には耐  
えられない、と。

終章の、第四楽章がはじまつたのだ。暗緑色の国民服を  
着た楽員たちのなかに、黒の服を着た女性楽員の数が目立  
つて多かつた。楽員の後の雑壇には男声女声の合唱団が百  
人以上もぎつしりとつめかけていた。男の合唱団員は、矢  
張り国民服を着ていた。こうした服装が永遠絶対に続ける  
か。そうとは信じられない、また誰も心底ではそうは思つ  
ていない。仮の服装だ、これも。そして仮のものがつみか  
さなつて戦いも生活も未聞の深みへとはまつてゆくにつれ  
て、何が一体、仮に起るか、自分自身までが仮に何を仕出  
来すか信じがたいというあやうさの中に、毎日を生きねば  
ならなかつた。しかも起つてしまつたことはとりかえしが  
つかない、不可逆である。

音に脅かされればされるほど、また見まいとすればする  
ほど、康子の視線は階下の、菊夫と夏子の二人の方へ吸い  
寄せられる。どうしようもなく息子夫婦の方へ吸い寄せら

れ、ともかくも彼女の眼差しはそのあたりにしばしばたゆとう。それはしかし、たゆとうのであって、そこに落着くという風ではなかった。息子夫婦の将来を、その安全を祈りこそすれ、祝福するだけの余裕はない、許されない。康子も夏子も知らぬ間に、いつ彼が手を振って飛び立ち、それぎりになるか、わからないのである。それで、彼等の結婚生活は、あつげなく、あつという間もなく終る。康子にあって、聴衆のなかの菊夫と夏子の二人は、危険な、眩い、眼をそむけたい……けれども同時にどうしても見守つていなければならぬものであった。特攻隊員に向つて、『諸君は既に神である』と訓示した隊長の話が伝えられていたが、その気持の表裏明暗は康子にも通じた。

しかし、音楽はいつの間にか一流れずつ人々の身体をつつみ、内側に入り込んでささくれだつた神経や、物の味も忘れ果てたような感覚を浸して一つのものに統一していった。なかには本当に涙を流しながら聴いている若者もいた。戦場から戻つて来てこの日比谷公会堂に入る機会を得た人は、こういうものがまだこの辺に存在するということに先ず驚き、自分がいまここにいるということが本当のこととは到底思えなかつた。そういう人は、音楽を聞いて楽しむというよりも、一層激しい、忍苦ともいうべき表情を浮か

べていた。会場の全体に、或る重い圧力がかかっていた。その圧力のなかで、音楽は鳴つていた。

だから、夏子が細い頸を曲げ頭をかき上げて菊夫に、

「ね、これ済んだらすぐにホテルの義母様のところへ戻らない？ 義母様はまだちよつとお仕事がおありだというんで、社へ寄られるそうだけど。あそこの地下室のグリル、お砂糖入りのお紅茶出すのよ。グリル閉まらないうちにね。それに、帝国ホテルのおじいさまからもお土産が届いているかもしれないよ」

と話しかけたとき、菊夫は不快に思った。演奏中に、愚にもつかぬことを喋つたりして、と。おれにとって音楽会などこれが最後となるかもしれないのに、娑婆の奴等は人の気も知らないで、と思うのである。元来菊夫は、今朝十時に上野駅へ出迎えに来た夏子の和服姿からして気に食わなかつたのだ。

「グリルで出すのよ、本当の紅茶よ」

夏子はしかし、へんに執拗だった。気分をこわされた菊夫は、

「あとで、あとあと」

と夏子の囁き声を抑えはしたものの、へんに執拗で、それに何だか浮き浮きしているらしい彼女が、『我が妻』ながら、何か異様なものに思われた。また、何かしら不吉な

影のようなものが、場所柄も心得ずに、人の多勢集まるどころへ派手な和服など着込んで来た彼女と自分との間に射し込んで来るように思われた。これは将来とも駄目かもしれぬな、矢張り重臣だ、枢密院だなどという、それもめかけの娘なんかは、と。

結婚以来、いや、交際がはじまって以来、決して口にすまいと思っていたことが、ともすればこのごろ浮かび上つて来るのだ。そしていま自分が思い浮かべたことばのなかに、将来、という一句があつたことに気付いて、菊夫はぎよつとした。既に体当り特攻は開始され、神風特別攻撃隊は第五次隊までで百名を越える突入者を出していた。人生二十五年と自らも云い、身を純粹とも生なまぐさいとも、愕くべき気軽さとも何とも云いようのない、次第に空気が稀薄になつてゆくようなところに隔離してゆくにつれて、たとえば今日のように外出で上京して来て、外部の、娑婆の空気に触れると、心の平衡がとれなくなつてゆくのであつた。人生二十五年という、そのような自分が可哀想であるとは思わなかつた。世間の人々の方がむしろ気の毒だという、妙に倒錯したような感覚と意味の世界に彼等は生きなければならなかつた。だから、外部の、いわゆる世間と接し、心を許すことの出来る相手、彼にとっては夏子や母といっしょにいと、気分が一瞬一瞬、自分でもびっくりす

るほどに変わるのである。怒りっぽくなったり、わけもなく泣きたくなったりする。それを抑えようとすれば無口になる、人には不機嫌なのかと思われる。

それを、夏子は感じとっていた。だから、若い夫が第九交響楽の、不吉な、重々しい感動に浸り切っているのを見ると、何か空恐しくなり、同時に自分だけその世界から疎外されているような苛立ちを感じるのであつた。彼女は何かかして菊夫のいるところへ自分も入りたいと思う。しかも、何か云うとなると、何ともぶざまなことしか云えない。今日、枢密院の会議に出る父と一緒に国府津から来るとき、和服を着て、モンペは風呂敷包みのなかに入れ、もつてはいたが、つけずに来た。これについても菊夫はぶつぶつ文句を云つた。上野駅からすぐに省線で新橋駅へ廻り、駅の近くの、義母の康子が通信社からもらっている新橋ホテルの五階の部屋を、康子の心づかいで午後だけまた借りをして抱き合つたときも、菊夫はへんにつけんどんで乱暴だつた。だから彼女は、和服に羽織まで着て来たことの本当の理由、

——わたし、妊娠したの、実はもう三カ月なの。  
とは、云いそびれてしまった。迂闊な話だが、つい最近まで夏子は気付かなかつたのだ。  
また午後になつてから、

「どうしても通えないからお勤め、やめたの」

と云って、その後へすぐに、実は身籠つたらしいの、とつけ加えようとしたのだが、菊夫が見違えるほどに節くれだった拳骨をつき出して、

「もうやめたのか。軍令部なんて滅多にない、お役に立てるところへ出たのに、国府津からじゃ遠いなんて贅沢いつてやめるなんて非国民だなあ」

と、どうやら冗談ではないらしい、とげとげしい口振りで云ったので、ここでも彼女は機会を失ったのであった。しかし手紙や他の人の口を通してではなく、どうしてもわが口でそれを、先ず第一に菊夫に告げねばならぬ、と彼女は決心していた。

菊夫は、外出に際しての隊長の訓辞、

『地方人の、娑婆の人たちの気持はまた別なのだから、貴様等はことばづかいに気をつけろ。貴様等は国民のなかから選ばれてここにおるのだ。誰もかれもが飛行機乗りではないぞ。近頃どうも、妻をもつておる奴等の中には、帰隊間際に喧嘩をしてくる奴がおるらしい。気をつけろ』

と云われたことを思い出したが、妙に胸にわだかまった不快さは、勿論消えはしなかった。夏子とは、どこかでかけ違ってしまった、精神生活がちつとも一致しない、どこでかけ違ったのか、それとも、はじめから一致点などなか

ったのに、戦争が追いたててくる生のいそぎにせかれて結婚したいという、もしそれだけのことだったとしたら、子供でも生れたらこれは只事ではなくなりはしないか。そう考え出すと、音楽は耳に入らず、頬をかすめて通り過ぎてゆくものになってしまった。それがまた、菊夫には不快だった。

ホルンが音程をはずして緊張を一時に破ってしまい、聴衆は妙にぎくしゃくした苛立たしさの始末に困っていた。時間が溶け去っていたのに、また現実の時間が音楽の破れ目から場内へ忍び込もうとして窺っていることが肌寒く感じられた。が、やがてまた音ははげしい上げ潮のように泡立って高まってゆき、その頂点で眼鏡を光らせたバリトン歌手が立ち上り、

——Oh Freunde,……

おお、友よ、このような音ではなく、我々はもつと心持のよい、もつと歓喜に充ちたものを歌い出そうと、シラーの歓喜頌歌をうたい出し、激しい空襲の予想される現在、ろくに物も食わずに、既にスローガンと化した信念というものに追いまわされている人々の胸を衝いたとき、二階の、康子の席の左上に坐っていた男が、びくりと顎をひいた。彼は両股をひろげて床を踏みしめ、体を乗り出して左膝の上に肘を突き、右手の拳を左手の掌に押し



つけ押しつけしていた。退屈することと、物を考える、或は考えないことが同意義でしかない男の姿勢であった。井田一作は音楽を聴いているのではなかった。聴きに来たわけでもなかった。何かを観察し監視しながら、何かを突きとめようとし、かつは、はっきり云って誰かの顔や身体の恰好を覚え込もうとしてここへ来ているのであった。彼は別な意味で、こんな音楽会みたいなものがまだあったのか、と信じられぬ風であった。オーケストラの前面、背の低い貧弱な身体ときの指揮者の横に、楽器も何も持たずに腰かけた四人の男女は、恐らく歌をうたうのだろうとは、彼にも想像はついていたのだ。けれども、いつまで待っても男も女も、どいつもこいつも立ち上りもしないので、彼はじりじりしていたのだ。それに、このベトオヴェンの第九なるものの何と長つたらしいことか。物を考えるには適しない。こんなことなら、わざわざ来るんじゃないか。役所で書類類めでもするか、国民酒場へでも行った方がましだった。たかが田舎の、神奈川あたりの特高に鼻をあかされてたまるか、と発奮してかかった仕事を、井田一作は抱え込んでいた。神奈川の特高なんかがやっていることは、とにかくとうとうこの夏に長い伝統のある雑誌をとりつぶすところまで行って行きはしたが、その先は、要するに単純なでっちあげにすぎん、何がこの先出るものか、と彼は

同僚にりきんでみせた。こっちはつい先頃処刑されたゾルゲや尾崎秀実の上をゆくようなやつを狙うんだ、ここだけの話だが、アメリカ人を鼻にもっていて、その鼻をアメリカに残して来た高級の記者から、ひよっとすると枢密顧問官までゆけるかもしれないんだ、しよっぱいたり出来んにしても、とにかくこれで重臣の一角を爆破するんだ、だから軍の後押しもあるんだ、とも威張ってみせた。枢密顧問官といえは天皇のすぐ傍である。彼は、天皇、と考えると、身が自動的に一度は硬直するが、しかしそれと同時に、その反対のもの、何かしらひとりでに、やりとして来て、脇の下あたりがこそばゆくなるような、一種の満足感をもつことが出来た。井田一作は退屈し切って眼鏡をはずしてレンズを国防色のハンケチで拭い、再び、実はもう見飽きた筈の、四十女の石射康子の小肥りにふとつた首筋から肩横顔のあたりをじろじろ眺めていたとき、突然、例のオーケストラの前に居並んだ男女のうち一人が立ち上り、歌い出したのであった。

——畜生、ドイツ語で歌いやがる。

彼は、男の歌手が手を前で組み、大口あけて首と上半身を左右にゆすぶり傾けながら、無理無体に舞台の天井に向けて伸び上りせり上ろうとでもするような風を呆れて眺めていた。